もんむす・くれすと!2
～巨女と触手と丸呑みと～
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
天乙宮

「ラビエル……あなたに密旨(みっし)を与えます」

「はえ？　美味しいんですか、それ？」

「密旨とは、秘密の命令という意味です。食べ物ではありません」

「なーんだ。じゃあいりません」

「いえいえ……女神からの直々(じきじき)の命(めい)を、そんなに簡単に断られては私の立つ瀬がありません」

「しょうがないにゃあ……」

「ラビエル。あまりおふざけが過ぎると怒りますよ」

「ごめんなさいイリアス様。ちょっとふざけたいお年頃なんです」

天界では、女神イリアスによる計謀(けいぼう)が秘密(ひみつ)裡に行われていた。[redacted]さの残る少年の天使が、女神の指示に耳を傾(かたむ)けていた。

「もう……。しょうがない子ですね。じゃあ今からは真剣に聞いてくださいね」

「はいっ」

「魔王城へ出向き、この密書を城主へ渡して欲しいのです」

イリアスは筒状に丸めた書状をラビエルの胸元へ差し出した。

「魔王城の城主って……つまり魔王にですかっ？」

ラビエルは書状を受け取りながら問いただした。
書状はピンクのリボンで縛られた上から、糊(のり)のついた紙切れで封をされていた。

「そうです。その密書は魔王に読ませるまで決して開けないでください」

「どうしてぼくに、こんな重大な役目を任されるんでしょうか？」

「上位の天使が魔王城へ出向けば、魔物たちに無用な警戒心を与えて混乱を引き起こしてしまう恐れがあります。その点、下級天使の中でも木っ端同然のあなたなら、万一見つかっても心配はいりません」

「なんですかそれ。それじゃあまるでぼくが捨て石みたいじゃないですか」

「違います。あなたにしかできない大事な使命なのです。ほかの天使では難しいのですよ。くれぐれも、魔王以外の魔物に手紙を読まれないようにしてくださいね」

「はーい」

「では案内役を呼びましょう。手筈(てはず)は伝えてありますので、彼女の先達に従えば無事に魔王の元へと着くはずです」

イリアスの背後から、くるくると旋回しながら飛行する小さな妖精の少女があらわれた。

「じゃーん！　待ったぁ？　私が居れば魔王の迷宮も箱庭同然よっ」

「えー、またリムルなの？　芸がないなぁ」

「こらこらこら。そこは喜ぶところでしょーが！」

「だってリムルじゃ弱すぎて魔王城の魔物に対抗できないよ」

「あんたイリアス様の話をもう忘れたの？　強そうな奴じゃ警戒されて危ないんでしょ？　その点、可愛い妖精さんと洟垂れ小僧の天使ならうってつけじゃない」

「ぼくは洟なんか垂らしてないよ！　垂らすのは愚痴と醤油くらいですっ」

「こらこら、二人ともケンカはおやめなさい」

「ほら、うだうだ言ってないでついてきなさい。行くわよ」

妖精のリムルと天使のラビエルは天の住居から地上へと向かった。

風の音だけが微(かす)かに響いていた。光が支配する天界から、闇と岩肌だけが取り囲む洞窟へと降り立った天使と妖精。
ラビエルは、先導するリムルの後ろ姿だけを頼りに歩き続けた。

「ここを進むと、魔王城に着くの？」

「そうよ。出口は城の中庭につながってるから、気を抜かないでね」

「どうして洞窟がお城につながってるんだろう」

「緊急用の脱出路でしょう。あと、お城より洞窟のほうが居心地のいい魔物の住処(すみか)になってる可能性もあるわね」

「えーっ！」

「しっ！　大声を出しちゃダメよ。見つかったらどうすんの」

「あわわ、魔物が住んでるなんて聞いてないよ」

「暗いから、音を立てずにこっそり行けば見つかりっこないわよ」

ラビエルは、無言でリムルの後ろを歩き続けた。微かな明かりが岩壁に反射し、闇に包まれた空間を洞窟だと教えていた。

「なんだろう……。さっきから妙な臭(にお)いがするような……。気のせいかな」

ふと、ラビエルが小声で口を開いた。

「そお？　私は何も感じないけど」

「微かだけど、たしかに生臭い臭いがする……。リムル、もしかして生理？」

「は……？　おまっ……今なんつった！」

リムルは顔を真っ赤にしながらラビエルの口を引っぱり出した。

「痛い、痛いよ！　口を引っぱるのはやめてってば」

「ふざけた事ばかりぬかす口はこれかーっ！　憎たらしい！」

リムルは両手でラビエルの口をつかみながら、膝（ひざ）であごを蹴りだした。

「痛た！　なんでそんなに怒ってるの」

「このバカ口！　この場で退治してやる！」

不意に、二人の背後から何かが蠢(うごめ)いた。

「あらあら、誰かと思ったら天使のお客さん？」

「うわっ。魔物に見つけられちゃった」

「あれはローパー娘だわ。くそー、こんな所にまで見張りが居るなんて」

筒状のボディからいくつもの触手を生やした異形。全身から生臭さを放つ粘液を滴らせ、二人を見つめる魔物。その瞳は毒気のない好奇心に満ちていた。

「見張り？　あんた達がギャーギャーうるさいから覗きにきただけよ。
ここで見張るものなんか何もないわよ」

「え？」

「いったい何をしているの？」

　ローパー娘はわずかに不審な面持ち(おもも)を見せながら疑問を投げた。

「えーと、趣味の散歩です。ほら、血糖値を下げて糖尿病を予防
するのに効果的なんですよ、散歩は」

「そうそう、洞窟散歩が妖精の間でも静かなブームなの」

「食後に散歩をすることでブドウ糖トランスポーターというタンパク質が細胞質内から
細胞膜に移動することによって、血液中のブドウ糖量を減少させて血糖値を
コントロールするのに最適だから散歩してるんです。決して、怪しくなんかありません」

　ラビエルは怪しげな言い訳を必死で並べた。

「ふーん。まあちょうどいいわ。暇だったから遊んでよ」

「あの……ごめんなさい。今日はすっごく忙しくて。散歩のあとは、
座禅をしたり、瓦を割ったり、浮世絵を摺(す)ったり、する事が山積みなんです」

ローパー娘の触手が地を這(は)いながらラビエルの足元ににじり寄った。
触手はラビエルの足首に巻きつくと、力を込めて上空へ引っぱった。

「うわわわっ！　やめてくださいっ」

複数の触手がラビエルを縛りながら持ち上げ、そのまま宙に固定した。
さらに他の触手がラビエルの服を引っぱり、脱がせ始めた。

「リムルっ。助けてぇっ」

リムルはいつの間にか姿を消していた。

「あんたが忙しくても、私は暇なのよ。
オモチャにして遊んであげるから、せいぜい楽しみなさい」
ローパー娘は不敵な笑みを浮かべながら、ラビエルの
身体(からだ)に触手を這わせた。
「あひぃっ」
「んふふっ。いい声だすじゃない。ノッてきたわ」
「いっ、いきなり何をするんですかぁ」
「ほらぁ天使くん、恥ずかしい所が丸見えになってるわよ？」

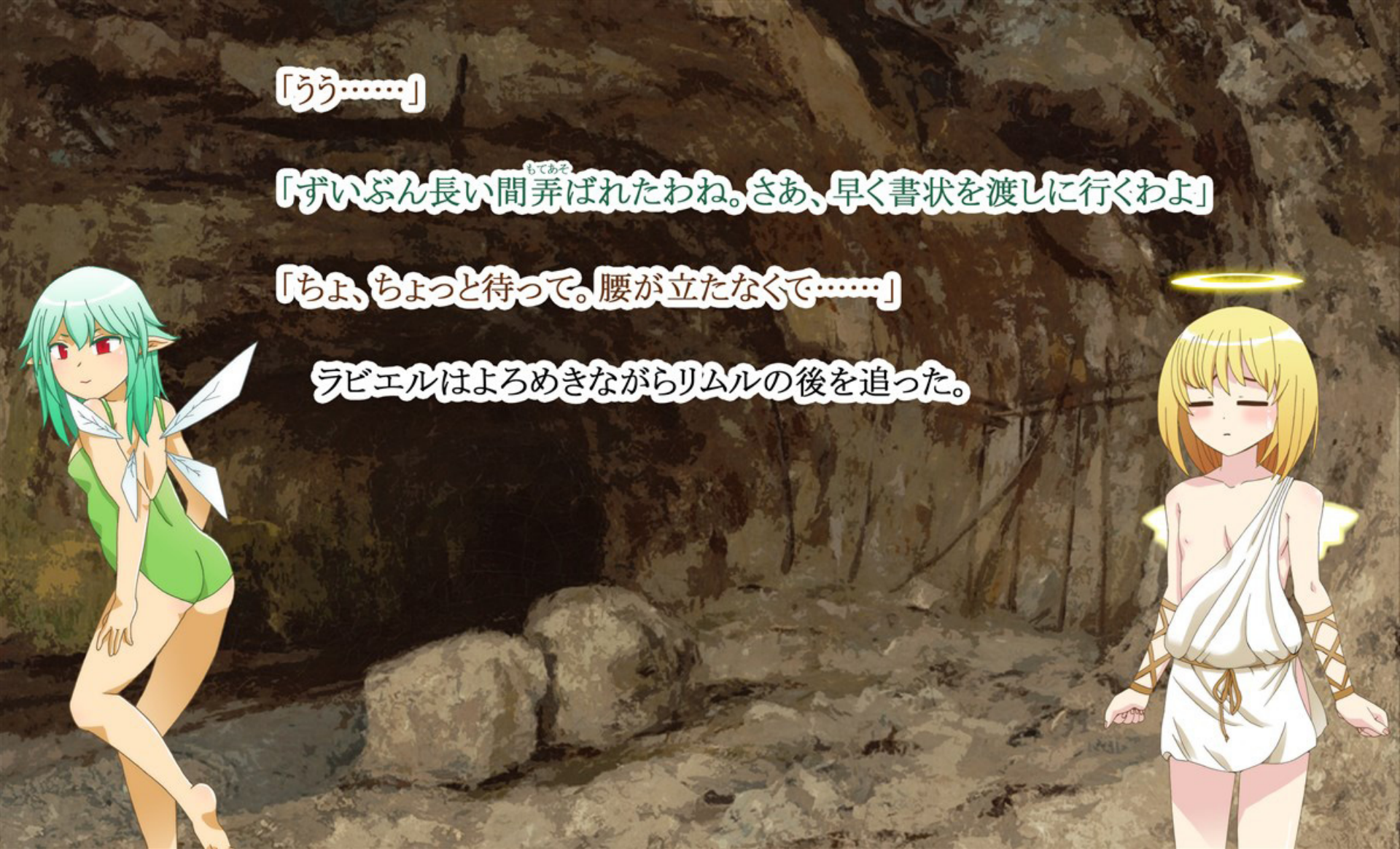
ラビエルは頬を赤く染めた。ローパー娘は天使の性器に触手を巻きつかせ、ゆっくりと絞め始めた。
「あぁーっ！」
ギュー
ギュー
「ここで射精してみてよ。私、男の子がイクとこ見たいなぁ」
触手は、ラビエルの竿を這いながら自身をめり込ませるように押し続ける。
「んんんっ……ああっ」
「気持ちいい？　ねえ？　射精しそう？　ほらほら、どうなの？」

「こうやって絞めながらこすると……もう出ちゃう？」
竿に巻きついた触手が、ぬめぬめと蠕動しながら絞るように
上下に動き出し、執拗に性器を責め上げる。
ギッチュ〜〜ギッチュ
ギッチュ〜〜
ピュー〜
「あああああっ。もうダメっ……もうダメっ……」
ラビエルの身体は汗をにじませながら熱くほてり、腫れ上がった性器が
ひくひくと痙攣を始める。その時、触手がひときわ強く竿を絞め上げた。
「んんーっ」
突き上がった尻が小刻みに震えると、ペニスから精液がほとばしった。

ぴとっ
「あはははっ。すごいすごい。じゃあ次はこっちでイッてみようか」
あまった触手が踊り出て、ラビエルの肛門に先端を押しつけた。
「はぁ……はぁ……。えっ……ちょっと待って……」
「中から思いっきり掻き回したら、どうなるのかしら？」
触手はじりじりと穴の奥へめり込んで行く。

もんむすくれすと！2

～巨女と触手と丸呑みと～


「うう……」
「ずいぶん長い間弄(もてあそ)ばれたわね。さあ、早く書状を渡しに行くわよ」
「ちょ、ちょっと待って。腰が立たなくて……」
ラビエルはよろめきながらリムルの後を追った。

「もう絶対魔物に見つからないように静かに進まないと」

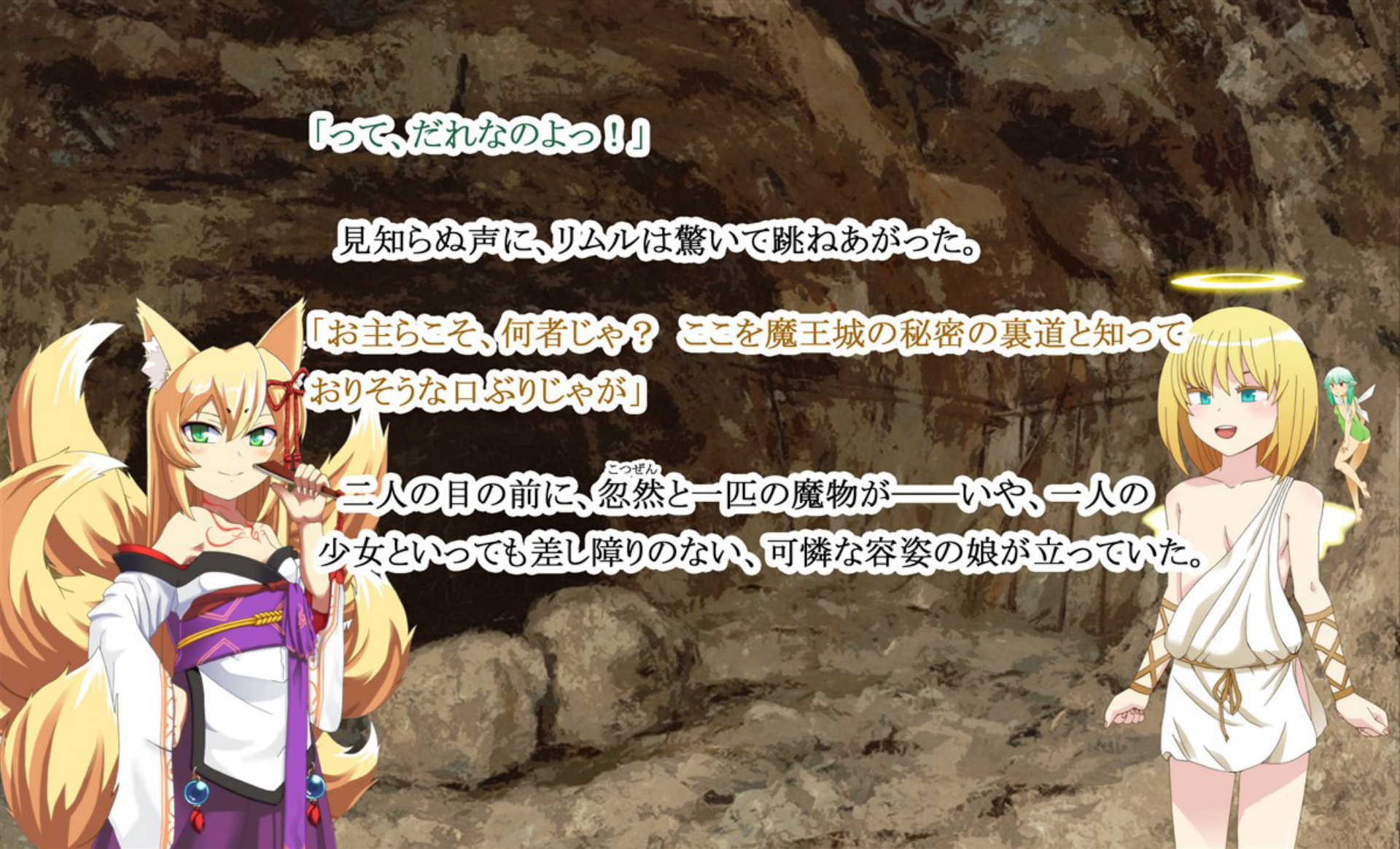
ラビエルは慎重な様子でつぶやいた。

「そうね。さっきの魔物はただの暇な住人だったからよかったけど、魔王城の内部者に見つかったらシャレにならないもんね」

「内部者に見つかると、どうなるのかのう」

「そりゃあ、牢に閉じ込められて、あれこれ尋問(じんもん)されたりすると思うわよ」

「ふむ。よからぬ事を企む者にはそんな顛末(てんまつ)もありうるのう」



「って、だれなのよっ！」

見知らぬ声に、リムルは驚いて跳ねあがった。

「お主らこそ、何者じゃ？　ここを魔王城の秘密の裏道と知っておりそうな口ぶりじゃが」

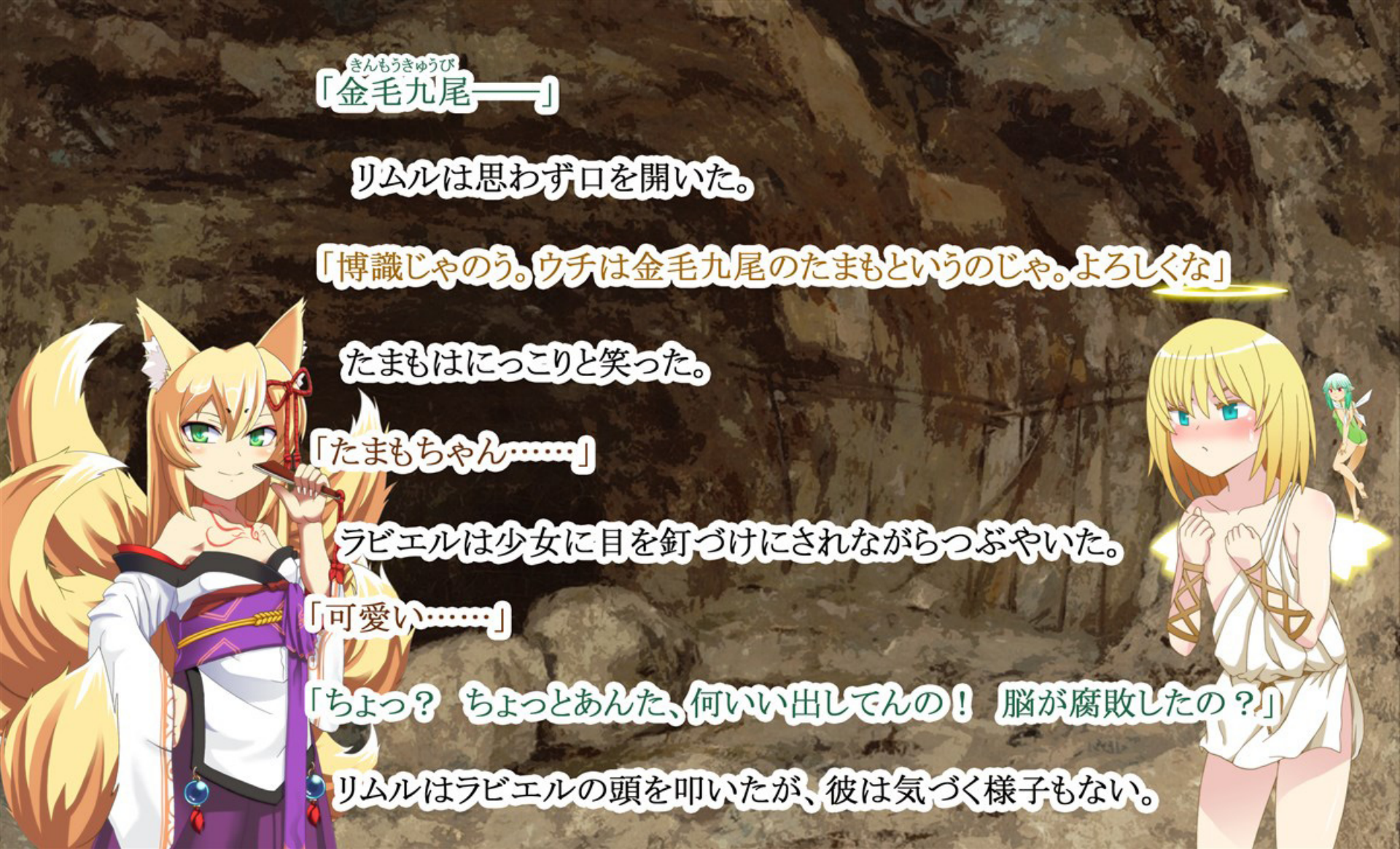
二人の目の前に、忽然（こつぜん）と一匹の魔物が――いや、一人の少女といっても差し障りのない、可憐な容姿の娘が立っていた。

「いっ……いえ、その、たまたま散歩道に選んだだけで……」

ラビエルはしどろもどろになって答えた。

「たまたま選んだ散歩道で、魔王城の内部者を気にするとは奇異な事じゃのう」

柔和な声音(こわね)だが、その響きには鋭く逆らえぬものがあった。
魔物の幼い体躯(たいく)に乗る、大きくとがった獣の耳。暗闇の中にもちらと黄(き)に輝く九つの尾。


「金毛九尾（きんもうきゅうび）――」
リムルは思わず口を開いた。
「博識じゃのう。ウチは金毛九尾のたまもというのじゃ。よろしくな」
たまもはにっこりと笑った。
「たまもちゃん……」
ラビエルは少女に目を釘づけにされながらつぶやいた。
「可愛い……」
「ちょっ？　ちょっとあんた、何いい出してんの！　脳が腐敗したの？」
リムルはラビエルの頭を叩いたが、彼は気づく様子もない。

「ふふ。お主、幼い顔立ちのくせに世辞(せじ)が上手じゃのう」

たまもはにんまりと微笑した。まんざらでもない様子だった。

「おや、これは何じゃ？」

と言うと、たまもはラビエルの懐(ふところ)に手を伸ばし、丸められた書状を奪った。

「あっ。それはっ」

「手紙か。何が書いてあるのかのう」

たまもがリボンをちぎろうとすると、ラビエルがその腕にへばりついた。

「ダメっ。それは開けちゃダメ！」

「そういわれると、ますます気になる」

たまもはラビエルを引き離し、ひらりと跳び退いて距離をおいた。

「ダメっ、ダメ。それは大事なものなんです。返してください！」

「ふむ。そうまでいわれると開けづらいのう。いったいだれに渡す手紙なんじゃ？
教えるなら返してやらんでもないぞ」

たまもは片手に持った書状をひょこひょこと振った。

「それは魔王に渡す書状なのよ。勝手に封を切られたら困るの」

リムルが答えた。

「なるほど。して依頼をしたのは誰じゃ？」

たまもはなおも問い詰める。

「イっ、イリアス様が、渡せっていって……。魔王に渡すまで、封は切るなっていわれたんです」

ラビエルは答えた。

「なるほど。そういう訳か。つまりお主らは郵便屋さんという事になるの」

「そっ……、そうなんですよ。ぼくたち天界の郵便屋さんなんです」

「ふむ。ご苦労であった。手紙はウチが魔王様に渡しておく。
お主らはもう帰ってもよいぞ」

たまもは歩き始めた。ふと踵(きびす)を返し、

「ああ。心配はいらん。ウチはこう見えても魔王様の側近じゃ。手紙を
勝手に読んだりしたら、魔王様にしかられるのはウチじゃからの。
相手に渡すまで封は切らぬぞ」

といい残すと、再び足を動かした。

「……」

「これでよかったのかな？」

「いやいや……おかしくない？　なんで側近が使い走りみたいなマネをするの？　書状を渡すのを許すなら、私たちを魔王に会わせればいいじゃない」

「うん。ぼくもなんとなく違和感を感じた」

「……握りつぶされるわ。勝手に書状を処分する気よ、アイツ」

「ええっ？　どうしてそんな事をするの？」

「側近なんてものは、独自のいろんな思惑（おもわく）を持ってるものなのよ。アイツの勝手な判断で、書状もどうなっちゃうか知れたものじゃないわ」

「ヤバイよ。取り返さなきゃ」

「追いかけるわよ！」